ける存在に對して否定的意見である。その論據は農村社會において身分的上下隸屬關係の存在せぬことにある。それでは今まで中國における封建制または半封建制の存在が主張されたのはいかなる立場においてであつたかといふと、いままでもなくマルキシズムのそれであつた。マルキシズムの立場にある人々が封建制を主張する論據の最大のものは剩餘生產物の分配關係、すなはち地代の率にあつた。この場合、封建制は經濟的側面から把へられてゐるのであるが、身分的隸屬關係を言ふ場合、それは法的な側面から把へられてゐる。そして注意しなければならないことは、兩者の封建制の意味する範圍が等しくないことである。西洋及び日本においては兩者は必ず並存したけれども並存は必ずしも一致ではない。マルキシズムの立場における封建制は、三つの發展段階、即ち古代奴隸制、中世封建制、近代資本主義制といふ生產樣式における、或ひは「社會の經濟的構成」における一範疇である。身分的隸屬關係を意味する封建制はかかる社會の經濟的構成の內で建てられた一つの法的制度である。前者は後者を含むが同一ではない。從つて著者が身分的隸屬關係が存在したことによつて封建制の存在を否定されても、それは今まで封建制の存在を主張して來た人々の意味する封建制を否定したことにはならない。兩者はもともと視角を異にするからである。

本書が出版されてから既に一年半を經てゐる。その間既に本書の價値は正しく認められてをり、その批評も一應は出つくしてゐる。今さら批評紹介でもないかもしれぬが、また考へてみると批評は何も新刊にだけ限る必要はあるまい。既に定評のきまつた著書論文を取り上げることは、それはまたそれで意義のあることだと思ふ。もつともこの退屈な紹介がどれだけ本書の値價を傳へ得たか、或ひは著者の値意を誤り傳へたところがあるかもしれない。著者福武氏の御寬容を願ふ次第である。

〔北村敬直〕

印度史概觀　足利惇氏著

昭和二十二年十一月二十日　東京、弘文堂刊
教養文庫版　一九〇頁　定價　三〇圓

本書は教養文庫の一書として、難解なる印度史各部門の學問的成果を極めて平易に且要を摘して略述し、具體的資料により之を裏づけ、讀者をして興味に惹かれつつ通讀せしむる如く記述せられあり、しかも、全卷を貫くに統一せる史觀を以てし、一見別世界にして、無關係たる如く見ゆる、古代印度と現代印度の間に、密接不可離の關係を認め、現代印度の抱ける苦惱の原因を、歷史的に形成せられし根强き分裂的種姓的印度社會及び之を地盤とせる印度文化がその民族としての統一を妨げしことに求められたり。即ち三篇より成る本書の第一篇「印度史概觀」に於て、印度の政治史を太古より現代に至る迄通觀しその特殊性を指摘し、第二篇「現代印度」に於て、現代印度の內包せる苦惱を分析してその二元性を回教徒侵入に直接起因せるものなるを歷史的に記述し、第三篇

「印度文化史概說」に於て、その二元性がアールヤ民族侵入以來歷史的に形成せられし階層的にして宗教的たる印度社會に內在せる必然的結果なることを具體的なる印度文化の史料を通して裏付けられたり。

現在の具體的事實を出發點として問題を提起し、古典に溯りてその始源を究め、宗教を、その環境たる社會を通し歷史的發展的に考察せむとする著書の立場は、近著「印度バルシー族とその習俗」にも見られ、示唆せらるるところ大なり、以下、少しくその內容に就き紹介す。

著者は劈頭、印度を以てそれ自體孤立せる世界なりと規定し、且西洋に對立せる東洋文化圈に於て、印度は爾餘の東洋の諸部分たる支那や波斯とも隔絕せし一個の孤立體系を有せる世界なるを指摘し、支那と印度とは、古代より現代に到る迄一貫して存續し來れる特殊なる文化圈なるも、この東洋の二大文化圈は、その根本に於て決して性格を等しくせるものに非ず、東洋に幾多の東洋あるを注意せざるべからず、とされたり。こは玩味すべき點なり。即ち、西洋文化の歷史は、その出發點に於て一の世界像を畫きありて、共通の文化形態を持ち一定の發展過程を採れる世界が基本となり世界史が考へられあり。ヘロドトスの著作は一民族の歷史を記しあるもそは當時の世界の姿に於て畫かれあり、又近世に於ける國民史の如きも何等かの形に於て世界像に關聯しあり。之に對し東洋の歷史學に於ては、統一的なるものが先驅をなしあり、支那に於ては、古來歷朝毎に纏められし正史が編纂されあるも、前朝の歷史を記すは、一の統一されし國家の出現が意識せられあるなり。即ち、西洋に於ける世界史に在りては、從來の世界の外に在る未知の世界を統一するてふ發展過程に於て諸國の文化を超えて一般に人類の文化發展が考へらるるに對し、東洋に在りては、統一されし國家の成立が前提されあり、前代を繼承する連續は存せるも次の世代を通じ發展するの考へは生ぜず、又自己の國家の周邊の諸民族を蔑ふ一般文化の如き意識は生ぜざりき。支那に在りては、古來異民族の多數を知りありしも夷狄蠻戎と共に中華の文化が一の一般的なる歷史的運命に在りとは考へず、又中華文化を他の民族が繼承し之を發展せしむべしとは考へざりしなり。支那にとりては、周圍の諸民族は之を支配することにて共に存すとは考へ得ざりしなり。即ち、東洋にては統一なる考へは支配的意識を多く有し國家の統一は政治的支配の觀念强く一般共通的なるものに歸屬するが如き意識たし。故にその國家を超え、(支配關係を超え)より廣きより高き世界的文化的統一は存せざりしなり。

しかるに同じく、東洋に屬せるも印度にありては、古來文化的に統一體を示しつつも政治的に行はれし民族的統一は見られず、國家を超え(支配關係を超え)一般共通的なる世界史の觀念生るべき筈なり。然も現實には然らず、凡そ印度には自他を含める客觀的歷史書は古來一も生れざりしなり。

著書は、之が原因を、印度文化の基盤を成せる印度社會の種姓制度に基く分裂に求めたり。種姓は結婚と職業相續の特

權を堅持し極めて排他的孤立的にして同一種姓に屬する個人はその輿論の代表とも見るべき「長老委員會」に絶對忠實なるを要請せられ、ここに政治的關係に對する種姓的限界あり國家の政治的勢力が實質的には武人階級にのみ依存せる結果、他の種姓の人々が國家的觀念に消極的となるてふ必然的本質を形成せしこと、回教徒侵入時の防禦がラージュプト戰士階級に一任せられありしが如し。同時に、同一種姓に屬する各個人は個々の種姓内に絶對的なる祭神を有し彼等の職業の孤立性と社會的分派性の精神的根據となしあるも、之等神々は根元的には印度萬神の一員として印度文化への歸一を豫定し全體的調和に關聯しあり。各種姓は自己の特權を主張すると共に爾餘の種姓の特權をも尊重して之を犯さず、種姓相互の孤立性が全體的に見て印度の社會組織に對し一の調和を保ちあり、この點よりせば、一種の政治秩序なり、即ち印度社會は文化的に統一體を示すとはいへ、その文化的統一は、内に種姓的分裂を含みしものにして、分裂的傾向を以て社會的發展を遂げたる全體的包攝的調和を示せるてふ複雜なる二重性格を有せるものなり。

著者は之が具體的説明として、この分裂階層的種姓社會の文化的統一を齎せる根本基調たる婆羅門主義的世界をその發生に溯りて考察しその發展の課程に於て佛教・耆那教の如き多くの非婆羅門的要素を印度化して之を包攝することにより絶えず複雜化し分裂化しつつ發展せる印度社會に即應しつつ更生發展せしを述べ、この婆羅門主義的世界の文化統一に對し、人間性解放による世界史的なる民族世界の樹立を唱へし佛教もその社會性を獲得すると共に逆に印度社會内に消滅するの運命を辿れるを指摘し、又印度を支配せし異民族の政治力も、常に之に先行せる強力なる社會的基調たる印度文化に對しては全く消極的受動的存在たりしことを政治史を通して歴述し、回教の理念をこの印度世界に妥協調和せし點にムガール帝國の興隆があり、回教正統派の復興運動が傳統的印度の利益と相反せし點にその衰亡があるを指摘せられたり。最後に、神の前に平等を説く超民族的なる世界性に準據し傳統的なる印度社會組織に强力なる對照をなせる回教世界の近世印度内部に於ける成立が、印度の文化統一を破壞し印度世界分裂の悲劇を生み出せしを説き、この苦惱より、印度教と回教の折衷宗教たるシーク教の如きが生れしも、印度的世界の餘りにも完成されし世界なるが故に、兩文化の高次的統一の困難なるを論ぜられあり。

〔佐藤圭四郎〕

代のものと思はれない。天師世家の教權の確立は北宋以後あるべく世代年數が合理的になるのは唐以後である。道陵の先世については元の趙道一の歴世眞仙體道通鑑に良の子、不疑の長子、典の子孫が政界に活躍し後漢の司空皓、太守綱らを出し、次子高の子孫が宦界に雄飛したとし、道陵の祖父は起、父は大順とするのに天師世家は父を綱、祖父を皓となし、長子の家系を盜んでをり一層信ぜられないものである。（宮川）